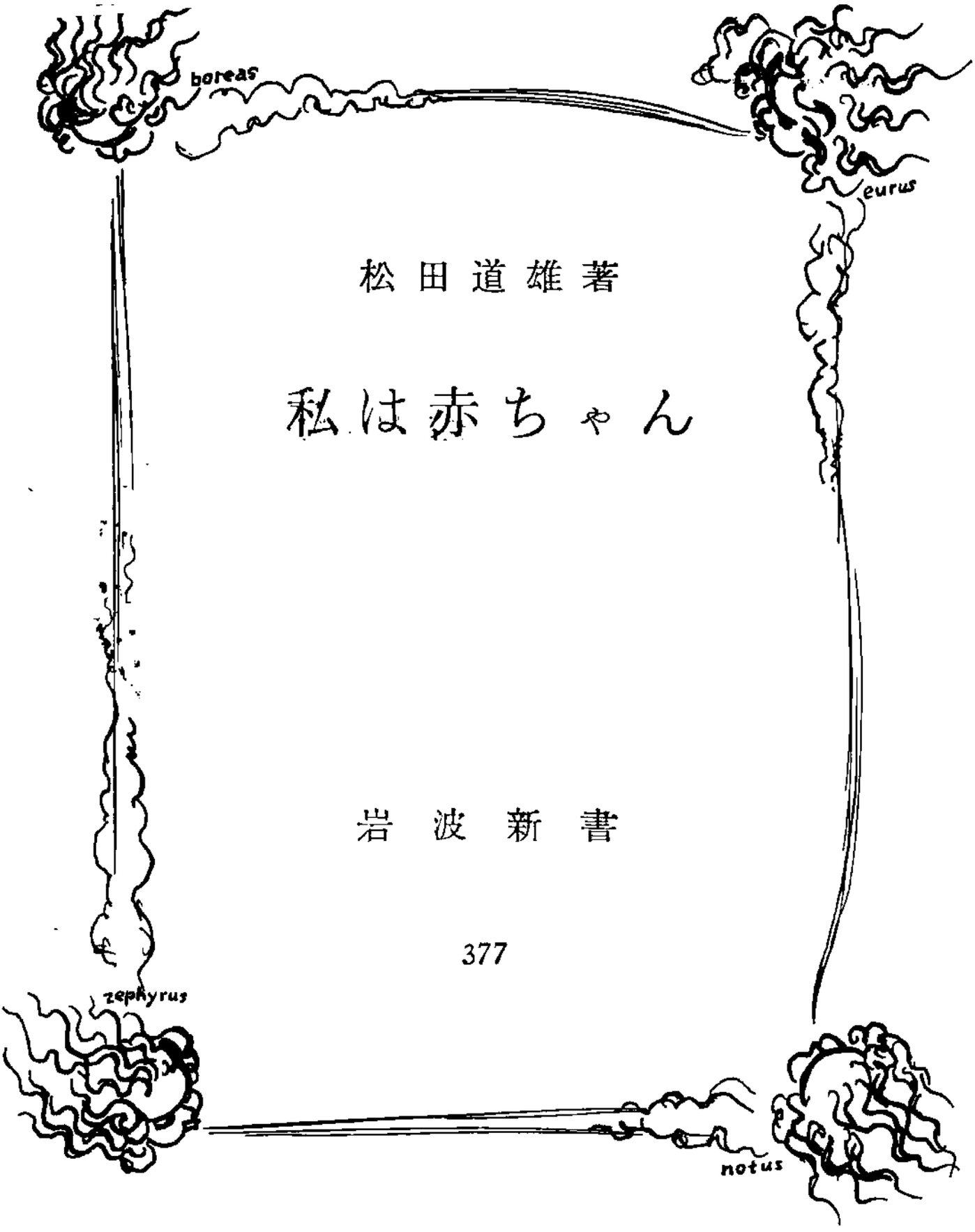
松田道雄著

私は赤ちゃん

岩波新書

C 136



松田道雄著

私は赤ちゃん

岩波新書

377

松田道雄

1908年茨城県に生まれる
1932年京都大学医学部卒業
現在—評論
著書—「私は二歳」「母親のための人生論」
「おやじ対こども」「私の読んだ本」
「自由を子どもに」「花洛」(以上岩波新書)
「育児の百科」「京の町かどから」
「日本知識人の思想」
「革命と市民的自由」
「君たちの天分を生かそう」
「恋愛なんかやめておけ」
「人間の威厳について」

私は赤ちゃん　　岩波新書(青版) 377

1960年3月17日　第1刷発行 ©
1982年9月10日　第33刷発行

定価430円

著者　松田道雄

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

I　生まれて半年

産　院・・・・・・・・やかましいのが一ばんきらい・2
乳がでない・・・・・・・あせっちゃだめです・・・・・4
わ が 家・・・・・・・・ダンチ住宅・・・・・・・・6
胎　毒・・・・・・・・ホッペタのブツブツ・・・・・8
滲出性体質・・・・・・・注射は中止・・・・・・・・10
パ　パ・・・・・・・・私とあそんで・・・・・・・・12
カッケ事件・・・・・・・吐乳と緑便・・・・・・・・14
乳が足りない・・・・・・粉乳を足す・・・・・・・・16
乳ぎらい・・・・・・・個性をみとめてください・・・18
電　車・・・・・・・・編み物はよして・・・・・・・20
おばあちゃん・・・・・・愛情過多・・・・・・・・22
デパートと映画館・・・・おもしろくない・・・・・・24
タンがきれない・・・・・鍛練が必要・・・・・・・・26
マ　マ・・・・・・・・忠実な観察者・・・・・・・・28

児童公園……赤ん坊の時間を……30
銭湯……行儀のわるいお客たち……32
夜泣き㈠……夜間の授乳……34
夜泣き㈡……体重をはかること……36
おしめカバー……あついときはダメ……38
あつい日……お乳をつめたく……40
遊園地……もうけ主義……42
離乳㈠……むずかしい離乳献立……44
離乳㈡……甘党とから党……46
離乳㈢……ありあわせで……48
離乳㈣……体重計をたよりに……50

II 誕生前後

腸重積㈠……急におこる腹痛……54
腸重積㈡……規則的な痛み……56
腸重積㈢……早ければ手術せずに……58

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目方が足りない……さかんな生活力……60
健康優良児……デブは人生の目的でない……62
おかゆがきらい……それも性分……64
汽車旅行……赤ちゃんは無視……66
旅　館……子供づれは虐待……68
五十円玉をのむ……ママの早業……70
夜泣き㈢……パパがお相手……72
夜泣き㈣……にがいくすり……74
夜泣き㈤……チエのついた証拠……76
排泄のシツケ……反抗期……78
シモヤケ……きついクツ下……80
ストーブ……サクをつくろう……82
予防注射……白の恐怖……84
種　痘……腕にせねばなりません……86
生活のリズム……体質と家庭の事情……88
ツイラク……頭をうつとバカになるか……90
迷い子……小さな密出国者……92

幼児をもつ母の会・・・託児所がほしい・・・・・・・・・94
ドライ・クラブ・・・パートタイム・託児所・・・・・・96
ヒキツケ・・・・・ひとりでなおる・・・・・・・・・98
はじめての熱・・・・・三日つづく・・・・・・・・・100
チエ熱・・・・・突発疹・・・・・・・・・・・・・102
保育所・・・・・超過勤務・・・・・・・・・・・・104
下痢がとまらない・・・感冒性下痢・・・・・・・・106
注射・・・・・役人のきめたとおりの治療・・・・108
カンの虫・・・・・ママは無反応・・・・・・・・・110
夜のオッパイ・・・・・最大の愛撫・・・・・・・・112
脳性小児マヒ・・・・・個人の力でどうもできない・・114
誕生日・・・・・市民の幸福・・・・・・・・・・116
むすび・・・・・育児過剰にならぬよう・・・・・・118

III 一歳半まで

歩行器・・・・・・ありがためいわく・・・・・・・122

動物園……あわれな動物……124
急に元気がない……エキリかもしれない……126
自家中毒……子供のノイローゼ……128
アメ療法……注射おことわり……130
自家中毒なおる……自然の力……132
おしっこがにごる……ジンゾウエンか……134
よいっぱりの朝ねぼう㈠スイミン薬……136
よいっぱりの朝ねぼう㈡それもまたよろしい……138
うつむいてねる㈠……ヘントウ腺肥大か……140
うつむいてねる㈡……病気じゃあない……142
ベッドでねなくなる……いずこもおなじ……144
生活日課表……新しい保健婦さん……146
食事にひまがかかる……三十分で切り上げ……148
標準離乳表……おかみの指図はごめん……150
犬にかまれた㈠……犬を逃がすな……152
犬にかまれた㈡……狂犬でなければ大丈夫……154
疑陽性㈠……もう一度しらべる……156

疑陽性(二)……三つの可能性……158
リンパ腺結核(一)……ノーマク炎の危険……160
リンパ腺結核(二)……誤診だった……162
小児結核保養所……治療しながら勉強……164
土をたべる(一)……貧血のせいか……166
土をたべる(二)……自然への郷愁……168
近所のハシカ……予防注射を……170
ハシカの予防注射……おそくなってはダメ……172
ハシカは軽くすんだ……もう一生かからない……174
私は歩ける……二階へあがる……176
ゼンソク(一)……恐るべき光景……178
ゼンソク(二)……人工病……180
小児マヒ(一)……はじめはカゼと同じ症状……182
小児マヒ(二)……ソークワクチン……184
おわかれ……子供と仲よしになりたい……186

挿絵・カット　岩崎千尋

I

生まれて半年

産院

やかましいのが一ばんきらい

私はおとというまれたばかりである。まだ目は見えない。けれども音はよく聞こえる。この産院でおこるいろいろのことも、気配でわかる。

看護婦さんは何だってあんなにドシンドシン音をたてて歩くのかしら。きっと目方がありすぎるんだね。それに部屋の戸のあけたてにあんな大きな音をさせなくったってよさそうなものだ。ああいうのは、きっと欲求不満があるんだ。待遇がよくないのかしら。それともきのうの休日にだれかとあう約束をしていてスッぽかされたのかしら。そういう人間同士のことで腹が立つなら人間同士で話しあって解決すればいいのに。何だって無生物の戸にあだするんだろう。

私はやかましいのが一ばんきらいだ。私だけではない。ママもそうだ。私たちはまだくたびれているのだ。ここしばらくは、ぐっすり眠りたい。それだのに廊下をドシンドシン歩かれたり戸をバターンとやられたりすると、その度にとびあがって泣き出さなければならない。

私が泣いていると、かわいそうに、新米のママは、私がどうして泣くのかわからないでドギマギする。静かにさえしてくれれば、私はおむつのぬれた時と、おなかのすいた時しか泣かない。

産院のなかが静かになると、こんどは窓の外がやかましくなる。一ばんいやなのは宣伝カーというやつだ。へんな歌謡曲のレコードをならしながらやってくる。それがとまると、いやにベタベタした調子で、商品の効能をならべたてる。バカていねいな口上だけれども、あんなに大きな

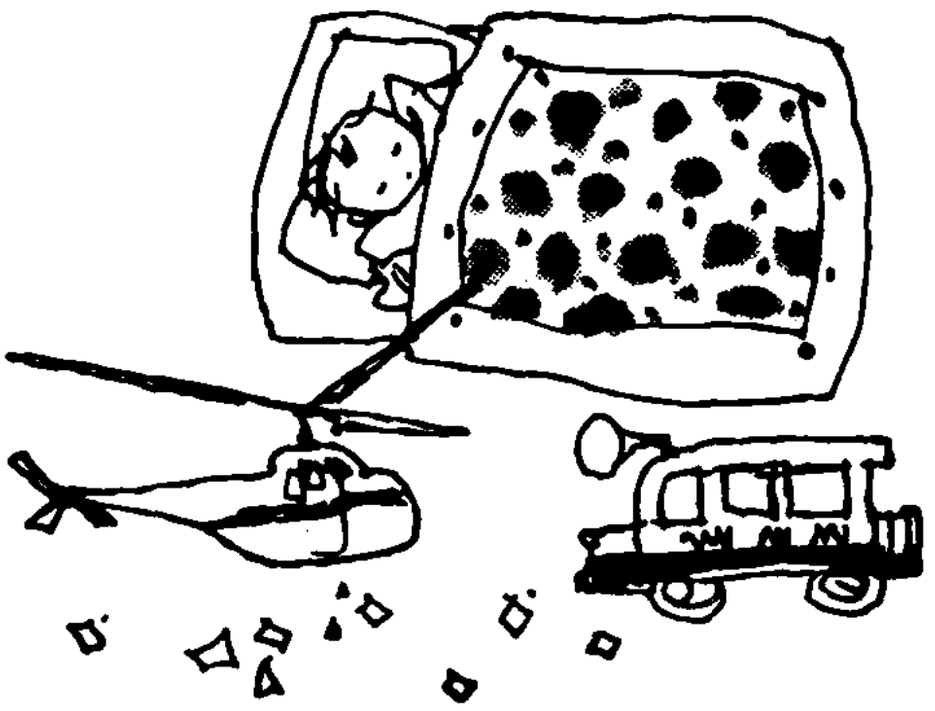
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

音を家の前でたてられたら、だれだって不愉快になる。私は大きくなったら、きょう宣伝カーでやってきた食料品は絶対に食べてやらないんだ。宣伝カーが行ってしまうと、ヘリコプターだ。ヘリコプターからビラをまいているらしく、子供が道路の上をかけまわって、争っている。あんな殺人的広告をゆるしておくなんてどうかしてる。

やっと静かになると、今度は親類の連中がお祝いにやってくる。それがみんな私の顔をのぞきこむ。中には抱きあげてセキをかけていってくれる人もある。カゼがうつったらどうするんだ。生まれたての赤ん坊にカゼがうつると肺炎をおこすことだってあるんだのに。あの連中は学校で生理衛生の時間に居眠りしてたのかしら。

院長も院長だ。建築現場みたいに新生児の部屋には「外来者立入禁止」というハリ札をしておけばいいんだ。でも、そういうことをするとあの産院はカタくるしいというようなことになって、はやらなくなるのかもしれない。お医者稼業というのもかわいそうなものだ。

もう一つこの産院でやかましいのは付添いのおばさんたちのおしゃべりだ。彼女らは、つねに誰かの勤務評定をやっている。六号室の奥さんはケチだとか、三号室の奥さんのところへ来るダンナさんは、奥さんにくらべて年をとりすぎているとか、あのお医者は四号室に回診するのが多すぎるとか、ほんとにうるさい。どうしてそんなに他人の生活に興味をもつんだろう。自分の生活が空虚なんだね、きっと。



乳がでない

あせっちゃだめです

六日もいるのだから産院の生活にもなれたといいたいが、どうもなれられない。つぎつぎといろんな事がおこるからだ。

おととい生まれた隣の部屋の赤ん坊が、ひっきりなしに泣くのだ。やかましいったらありゃしない。ママが助産婦に、お隣の赤ちゃんはお乳が足りないんじゃありませんかってきいたら、お乳はよく出るんだそうだ。どんなことしても泣かはるややさんがありますにゃと、付添いのおばさんがいう。ああいう赤ん坊は、きっと神経質というんだろう。どうも、お乳を落ちついてのんでいないようだ。すこしのむと、満足して眠ってしまい、また、おなかがすいてすぐに目をさまして泣く。泣きだすと怒ってしまってお乳に吸いつこうとしない。昼も夜も泣いている。あんなに泣くとデベソになるんだがなあ。

付添いのおばさんは、お人よしで、働きものなんだけれど、医学的清潔ということに関心をもたないのがこまる。ママの乳があまりはらないで、よくでないと、ブドウ糖液というのをのましてくれる。それを杯にこしらえて、脱脂綿にひたして吸わしてくれるのは閉口だ。味がいいから、いくらでも吸うのだけれども、おばさんの指についているきたないものが、脱脂綿にしみこんでいる液にとけて、それがみんな私の口の中へはいってくるのだ。

もしあのおばさんが赤痢菌の保菌者だったりすると、私は赤痢になるおそれがある。脱脂綿に

しましてのませるのだけは、もうやめてほしいものだ。
ママは乳がでないのを心配してきょうから乳もみさんをたのんでいる。パパは家から鯉コクをつくってもってきてくれた。乳のでる注射もはじめた。院長はニャニャ笑って「これをやるとお乳がでますよ」といって注射針をさしていた。あの院長はすこしずるい。暗示療法をやろうと思っているのだ。だが大悪人でないから、ニャニャ笑ってしまうのだ。
ママ、心配しなくっていいんですよ。私がまだそんなにつよく吸えないから、お乳もでないんです。そのうちに、私もつよく吸うし、乳のほうも分泌がふえるから、お乳は足りるようになりますよ。あせっちゃだめです。
だが、よく考えてみると乳もみも鯉コクも注射も、けっきょくはママのあせりを治すためのもののようだ。医者のやる治療というものは、そういうものらしい。病気が自然に治るまでのあいだ病人を不安から救っておくということなのだろう。よい医者というのは、病人を大舟にのった気持にさせておいて、そのあいだに病気を治してしまう医者だ。いくら病気を治しても、病人とケンカわかれしてしまうようなのはヤブといわざるを得ない。医者と病人との間に、お互いの信頼がなくては治療なんてうまくいくはずがない。ママが乳もみさんを信頼しているのはいい傾向だ。乳もみさんもなかなか心得たもので、自分がもんでからお乳がよくでるようになった人の話ばかりしている。

わが家

ダンチ住宅

とうとう「わが家」へ来た。ママがパパの来るたびに、早く帰りたいというので予定の二週間をやめて、十日目に帰ってきたわけだ。

パパも会社を休んで迎えに来た。三人で車にのって帰ってきた。「わが家」はダンチ住宅である。大へん近代的な建築なのだそうだが、私には、あの産院の木筋ハリボテのほうが気持がいい。ダンチの家は、どうも風通しがわるい。冬は熱がこもっていいかもしれないが、夏はずいぶんあついことだろう。日本なんて国は熱帯といってもいい。竹がはえたり、米がとれたりするところの住民は、大ていはだかで暮しているのでもわかる。こういう熱帯国は夏のあつさをどうして防ぐかということに主力をおくべきだ。冬はこたつがあれば何とかなるんだから。

それに、この「わが家」も思ったより静かでない。のきなみにラジオがかけっぱなしだ。これはドロボーよけだそうだが、いったんるすと見破られたら、こんなに音を立てていては、少々トビラをこわされても隣家では気がつくまい。

夜はラジオの音がテレビにかわるが、それにまじって二階からピアノの音がやかましい。何でも二階の住人は、その娘をピアニストに仕立てあげるつもりだという。集団住宅でピアノのけいこをするなんてのは、どうかと思う。世界で一ばん人口密度の高い国でゴルフをやるのと同じ心理だ、自分だけが特にえらばれた人間だという気持だ、一たいどなたがおえらびになるのだろう

か。

住宅公団では音楽家志望の人のために、特別の防音ダンチというのをつくればいい。

夜になってもう一つやかましいのは、電気冷蔵庫だ、突然に怪しげな音をひとしきりやる、この機械をつくった人間は、不眠症の苦痛をまるでしらない、熟睡家なのだろう。

夜がやかましいので、私の生活のサイクルは昼と夜ととりかわってしまった。午前中はとても気持よく眠る。どうかすると、五、六時間ぶっつづけでねてしまう。それでいて夜中に目がさめて、何度もお乳がほしくなる。

お乳をのむ時間が、そのためにひどく不規則になってしまった。ママはそのことをひどく気にやんでいる様子だ。婦人雑誌で「赤ちゃんのしつけは規則正しい授乳から」という標語を読んだのを覚えているためだ。

だがママは「わが家」のやかましさでは、いくら三時間ごとに規則正しく授乳したところで、私が規則正しく眠るとは思えないというので、午前中ゆっくり眠らせてくれる。

夜に遊びに来た隣の奥さんは、私が泣くのをみて、赤ん坊の夜昼とりちがえているのには、睡眠薬をのまして夜に眠らせればいいとママに教えていた。自分の家のテレビの音を静かにしないでおいて、私だけ睡眠薬で眠らしちまおうなんて、全くやりきれない。

ホッペタのブツブツ

二、三日まえから私のホッペタだとか、ひたいだとかに、小さいニキビのようなブツブツができて来た。毎朝私を抱いてくれるパパがまず見つけていった。

「ハシカじゃないかしら」

子供の病気といえばハシカぐらいしか知らないパパのいいそうなことだ。

「ハシカって五カ月すぎないと、かからないって育児の本にかいてあるわ」

私ができてから断然、知識の高さでパパを圧しているママがいった。

「きっと何かの皮膚病よ。ひょっとするとわるい病気のイデンかもしれない」

「バカなこといえ」

小戦闘が始まったところへ隣の奥さんがやって来た。そして私のブツブツをみていった。

「これはね、シンシュツセイタイシツよ。うちの妹の子もこれでこまったわ。早くみてもらわないと、ひどくなっちゃうわよ」

だれにみてもらうかということでひともんちゃくがおこってしまった。隣の奥さんとパパとは、これは皮膚病だから、ダンチの入口の皮膚科の先生のところがいいというし、ママはお産以来この私を知っている産院の先生がいいという。産院は遠いうえに、ママがまだもう一つしっかりしないので、とにかく近くの皮膚科の先生にみてもらうことになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com